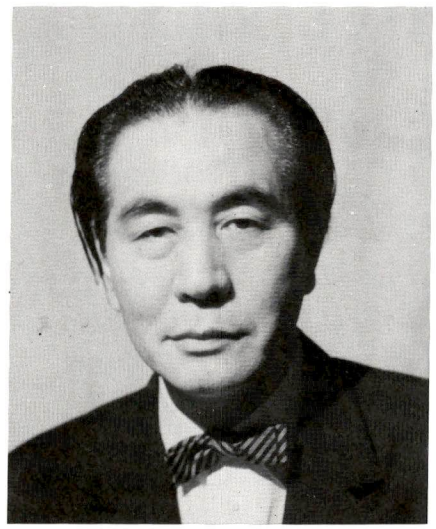
日本の交響作品展＝4

伊福部昭

日本の交響作品展＝4

伊福部昭

新交響楽団・第87回演奏会



恩師、伊福部昭先生の新しいスコアの演奏が許されたことを、大変、光栄に思います。

私とともに20数年を過してきた、アマチュア・オーケストラ、新交響楽団にしても、その思いは同じはずです。

ひとつひとつの音が、鋭く空間を削りとっていくように、出来るかぎり生々しく、そして烈しく、あの特有な魅力に満ちた伊福部作品の世界を、造形していくことが出来たら——それが今の、私たちの希いなのです。

プログラム
Programme

オーケストラとマリムバのためのラウダ・コンチェルタータ ——— 1979
LAUDA CONCERTATA per Orchestra e Marimba

マリムバ　安倍 圭子
Marimba　Keiko ABE

ヴァイオリン協奏曲第二番 ——— 1978
CONCERTO No.2 for Violin and Orchestra

日本初演
Première in Japan

ヴァイオリン　小林武史
Violin　Takeshi KOBAYASHI

タプカーラ交響曲

SINFONIA TAPKAARA

〈1955〉
1979改訂
改訂初演
Revised première

I．レント～アレグロ
Lento～Allegro

II．アダージオ
Adagio

III．ヴィヴァチェ
Vivace

指揮　芥川也寸志

演奏　新交響楽団

独奏　マリムバ　安倍圭子

ヴァイオリン　小林武史

1980年4月6日〈日〉午後2時

東京文化会館大ホール

主催／新交響楽団

後援／毎日新聞社

協賛／日本作曲家協議会

協力／サントリー音楽財団

Lauda Concertata

Per Orchestra e Marimba

Akira IFUKUBE

Adagio religioso ♩= 54

Piccolo

Flauti grandi I II

Oboi I II

Corno Inglese

Clarinetti in Sib I II

Clarinetto basso in Sib

Fagotti I II

Contrafagotto

Corni in Fa I II III IV

Trombe in Do I II III

Trombani tenori I II

Trombone basso e Tuba

Timpani

Batterie I II

Gran Cassa

pp mapesante

Arpa

Reff Mib

mf

Sta bassa

Marimba

Adagio religioso ♩= 54

Violini primi

f ma legato

Violini secondi

f ma legato

Viole

f ma legato

Violoncelli

pesante

div.

Contrabassi

mf pesante

mf

ラウダ・コンチェルタータ

作者の言葉

ラウダ・コンチェルタータとは，司伴楽風な頌歌と云う程の意ですが，この作品では，マリムバとオーケストラとの協奏の形がとられています。

ゆるやかな頌歌風な楽案は主としてオーケストラが受けもち，マリムバは，その本来の姿である打楽器的な，時に，野蠻にも近い取扱いがなされています。

この互に異る二つの要素を組み合わせること，言わば，祈りと蠻性との共存を通じて，始原的な人間性の喚起を試みたものです。

解説

1979年９月12日，新星日響の創立10周年記念作品として，指揮山田一雄，マリムバ安倍圭子によって初演され，好評をもって迎えられた。

初稿は，1976年７月19日に脱稿されたが，初演に当って，マリムバのパートに僅かながら改訂が加えられた。

一楽章形式がとられている。

演奏時間27分

To Takeshi KOBAYASHI

CONCERTO No. 2
for Violin and Orchestra

AKIRA IFUKUBE

1978

Lento grandioso, quasi Cadenza

Flauto piccolo

2 Flauti grandi

2 Oboi

Corno Inglese

2 Clarinetti in Sib

Clarinetto basso in Sib

2 Fagotti

Controfagotto

4 Corni in Fa

3 Trombe in Do

2 Tromboni tenori

Trombone basso e. Tuba

Timpani

2 Batterie

Arpa

Lento grandioso, quasi Cadenza

Melodia sul IV^a corda sempre

Violino solo

sonata

Lento grandioso, quasi Cadenza

Violini primi

Violini secondi

Viola

Violoncelli

Contrabassi

ヴァイオリン協奏曲 第二番

作者の言葉

一個のヴァイオリンと云う楽器がもつ特性を，オーケストラとの対比によって捉え，その協奏を通じて，吾々の血に隠くされている感性を問いなおして見たいと考えました。

主要なモチーフには，傳統に近い旋法が用いられています。

と云うのは，作品は民族の特殊性を通過して，共通の人間性に至達しなければならないと云うのが，作者の願いであるからに他なりません。

友人で優れたヴァイオリン奏者である小林武史君に献呈されています。

解説

1978年秋脱稿，翌1979年３月８日，９日，チェッコスロバキア，国立ブルノ・フィルハルモニーの定期で，指揮ズデニック・コシュラー，独奏小林武史によって初演され，続いてセナチェック・フィルハルモニーにより，同月15日オストラーヴァ，16日カルヴィーナで上演され，好評を博し，多くの批評のとり上げるところとなった。

本日の演奏が，日本における初演である。

協奏曲の一番は二楽章形式であったが，この二番では一楽章形式がとられている。

演奏時間28分

To Mr. Atsushi MIURA

Sinfonia Tapkaara

I

Akira IFUKUBÉ

Revision 1979 (1955)

Lento molto ♩=40

Ottavino

2 Flauti

2 Oboi

Corno Inglese

2 Clarinetti in Si♭

Clarinetto basso in Si♭

2 Fagotti

Contrafagotto

1° solo

mf espr.

4 Corni in Fa

3 Trombe in Do

2 Tromboni tenori

Trombone basso

Tuba

Timpani

I°

Batterie.

II°

Arpa

Lento molto ♩=40

Violini primi

Violini secondi

Viole

Violoncelli

Contrabassi

mf espr.

mf

タプカーラ交響曲

作者の言葉

作者は，アイヌ語でシャアンルルーと呼ぶ高原の一寒村に少年期を過しました。そこには，未だ多くのアイヌの人達が住んでいて，古い行事や古謡が傳承されていました。

タプカーラとは，彼等の言葉で『立って踊る』と云うような意をもち，興がのると，喜びは勿論，悲しい時でも，その心情の赴くまま，即興の詩を歌い延々と踊るのでした。

それは，今なお，感動を押え得ぬ思い出なのです。

その彼等への共感と，ノスタルヂアがこの作品の動機となっています。

作品は，中学一年からの友人で，博識な音楽評論家である三浦淳史君に献呈されています。

彼は，少年である私をそそのかし，私を作曲と云う地獄界に陥しいれたメフィストフェレスなのです。

解説

初稿は1954年暮れに完成，翌1955年１月26日，アメリカ，インディアナポリス・シンフォニー・オーケストラ，指揮フェビアン・セヴィツキイによって初演された。

しかし，その後，作者はこれに飽きたらず数年前より改訂に着手し，昨年十二月にこれを脱稿した。

作者によれば，主たる改訂は，一楽章の冒頭，二楽章の中間部，三楽章の結尾部に行われたと云う。

今回は，この改訂版の初演である。

次の三楽章より成る。

Ⅰ．レント～アレグロ
Ⅱ．アダーヂオ
Ⅲ．ヴィヴァチェ

演奏時間28分

「伊福部　昭・個展」に寄せて

三浦淳史

新響の「伊福部　昭・個展」のプログラム・ブックに〝伊福部　昭論〟のようなものを書いたらというお話だったが，どうもそう改まったものは書けそうにもない，弱ったなあと思いあぐんでいるとき，郵便屋さんが『ザ・タイムズ』紙を配達してくれたので，そっちに眼をとおしていると，W.H. オーデンの伝記の書評のなかに，ぼくにとっては，うまいいいわけになることばがのっていたので，それを書きうつすことからはじめよう。

オーデンはニューヨークからスティーヴン・スペンダーに宛てた私信のなかでこういっている：「君が君の友人たちに関する評論を公表することに対する君の熱情は，いつもぼくにとっては，いささか奇妙に思えてならないんだ。君が鋭いことをいわないというんじゃないが――君はどうしてなかなか鋭い発言をしているよ――友人だからといって依估贔屓しない清廉潔白な役をよそおうってのは疑問だよ。知らない人について客観的になるってことがむずかしいように，よく知っている人はそれも愛情を感じている人の場合はまったく不可能だよ。ぼく個人としては，友人の作品の評なぞけっして書くつもりはないねえ」。

まったくそのとおりだ。これまで，ぼくは伊福部　昭について書いたことはほとんどないが，わが家のアルヒーフ（押入れのこと）が月刊誌でいっぱいになってきたので，今年になってから，ぼつぼつ整理しだしていたら『音楽芸術』誌の昭和32年５月号の「親友交歓」と題する読み物で，自分が伊福部　昭のことを書いているのに再会した。昭和32年というと，1957年である。20余年前の記事だが，読み返してみると，ぼくの心情としては，昨日のこととしか思えない。いささか誤解を招くかと気になる個所もないわけではないが，オリジナルなままで再録させてもらうことにした。ついでに，一方的で申訳もないが，グラビアも複写してもらおう（向かって左側の端正なプロフィルを見せているのが，伊福部　昭です）。

その前年の２月に，NHKの招きで２週間ほど滞日したブリトゥンとピアーズの思い出もよみがえってくる。あのころ，まだ少年の面影すら残していたブリトゥンは，1976年の12月に，63歳という若さ(！)で，心臓障害のため世を去っている。それにつけても，こうして「伊福部　昭・個展」を聴けることを誰に感謝したらいいのだろう。ぼくたちが〝会長〟と呼んでいた伊福部の長兄宗夫氏と北大管弦楽団を指揮しクラシカル・ギターのリサイタルももった（札幌で）次兄の勲さんのお二人が存命ならば！早坂文雄君存命ならば！伊福部の才能を愛して没我的な助力を惜しまなかったアレクサンドル・チェレプニン，存命ならば！「新音楽連盟」のメンバーであった小岩・工藤・有田の諸学兄は健在であると聞く。彼らと伊福部の加餐を祈ること切なるものがある。


親友交歓
三浦淳史氏（音楽評論家）
伊福部昭氏（作曲家）
伊福部氏宅にて

ない純白なレターペーパーに角封筒を使っていた。整理好きな伊福部は当時の僕の手紙全部今なお所蔵しているそうである。僕もトランクの中に入れて持っていたが、仙台・東京・張家口と各地を転々しているうちに一枚もなくなってしまった。ここで、「若き日の手紙」を御披露できないのは誠に残念だ。

富樫康君の文献――「日本の作曲家」（音楽之友社刊）――によると《当時16歳のメフィストは、15歳の伊福部に、作曲以外は音楽上無意味だと力説したため、その言を正直に受けた彼は、独りでひそかに作曲の勉強を始めた》とあり、カッコして（伊福部は三浦のことをメフィストフェレスと綽名している）という註釈をつけている。僕は伊福部から面と向かってそう言われた覚えはないが、彼の才能にほれこみ、作曲という業を彼にせおわせたメフィスト的役割を果したことになるかも知れない。僕は優れたアジテイターだった（今はもうその能力もないようなので過去形にしておく）。伊福部にもその能力は相当なもののようで、彼が上野に出講していた頃は作曲科の若い学生をインスパイアするところが大きかったらしい。当時学長をしていた小宮豊隆先生が、伊福部君のようなひとこそ、芸術の学校には必要であると言っておられた。僕は先生の不肖の弟子の末席を汚しているつもりだが、さすがに先生の勘は鋭いと思ったことがある。最も教師らしくない教師だが伊福部は便々と教壇に立っているいわゆる功労者が勤続三十年かかってもできないことを数年でやっちゃったのではないか。以来講壇に立たないのは楽界の一大損失だと思う。

伊福部はいわゆる楽壇づき合いをしないので、誤解曲解されることも少なくないらしい。どだい人間関係というものは誤解の集積だから致し方がないと思うが、伊福部でも僕でも日本人好みの福徳円満型に言いようのない反撥をもっている。もっともらしく答えておけばよいものを、鷗外流にいえば一寸ミスティフィカシオンをやる悪癖がある。これは僕らが受けたあの偽善的な修身的形式教育のワクの中で音楽をやってきた反逆的精神のお蔭で、それが脈をひいているんだと思う。だから芸術の分野でも如何にももっともらしい芸術や芸術家と称するひとたちに反撥を感じるのだ。いつまでたっても青くさいことだと思うが、いつになったら円満になれることやら望みがなさそうだ。

しかし、近年の伊福部は青くさいところや神経質なところが覆われてしまうくらい日本人離れしたタイプになってきた。この写真をとったときなど、アイ夫人の自家仕立になる、婦人用のイギリス製モヘア地の上衣にバスケットのような厚手のズボンという部屋着をゆったりと着こなしているときは一寸日本人離れがしている。チェレプニン夫妻はよく伊福部のことをロシア人に似ていると言ったものだ。仕事の上ではやはり凝り性で神経が細かくゆきとどきながら、人間としては北海道の原野を思わせる茫漠としたところが出てきたのは嬉しいことである。

（筆者は音楽評論家）

伊福部昭とメフィスト

三浦淳史

伊福部昭との友情はもうじき三十年になるという永い友達づき合いだから、年代記的に書いていったら、優に一巻の書物になるだろう。僕たちは札幌二中でめぐりあったわけだが、今中学時代の友人といえば彼ひとりで、すべては忘却の彼方へ消えてしまった。小説家の船山馨、彫刻家の佐藤忠良という連中も同期だそうで、伊福部とは現在も面識があるらしいが、僕は全く記憶にないところをみれば、全然つき合いもなかったらしい。学校の名称も変わって今は西高校というそうだ。札幌一中というのは雪戦会で有名なくらいだから、質実剛健の校風で知られ、われら軟弱な二中生からいわせると殺伐粗野な点取虫であった。二中の方は当時のおよそ非文化的な学校教育から見ると、音楽部の活躍もかなり盛んであったし、音楽好きな先生に恵まれていた。北大のオーケストラでタクトをとったことのある植物の先生とか、やはり北大出身で担当の化学よりも音楽が好きだった「ジャックさん」がいた。ジャックさんは今十勝の中学校長をしていて、去年上京の節、伊福部の家に訪ねて来られたそうだ。ジャックさんのきもいりで校内音楽会も開かれ、伊福部のヴァイオリン独奏はいつも音楽会の白眉であった。もうホーマンをあげて、バッハなども手がけるほどだった。伊福部の演奏だけは野次が飛ばなかった。長身で美少年の伊福部は金ボタンながら「ヴァイオリニスト」の風貌をそなえていたせいかさすがの腕白連もシーンと耳を傾けたのである。何しろ音楽なるものは男子中学生の為すべき業(わざ)ではなかったし、カリキュラムからは除外されていた時代のことだから、一度僕が「アイ・アイ・アイ」を独唱した際なぞ、白いハンカチで汗をぬぐったところワッと野次がわいて散々な目にあった。そこえゆくと伊福部は白面の貴公子といった風格があって、僕なぞ伴奏者が前奏を五、六べんやって、やっと入(はい)れたほどあがったものだが、彼は冷いくらいあがらなかった。夏休みになると、伊福部はおやじさんが村長をしている十勝国音更村に帰省してしまうので、僕は三日毎に「ラヴ・レター」を書いた。伊福部は美少年だったし、僕の彼に対する友情にはホモ＝セクシュアル・ラヴに近いものがあったかも知れない。もちろんジイドのようなのではなく、極めてプラトニックであった。三島由紀夫はホモ＝セクシュアリティの弁護をしているが、僕も去年ベンジャミン・ブリトウンとピーター・ピアーズの男性コンビが来日した際、二人の友情を眺めて、中々いいものだと共感したことがある。僕がぶしつけに何故結婚しないのかと愚問を発したら、ピアーズは《フェイト！　フェイト！　フェイト！(運命だ)》とたてつづけに三連発して逃げてしまったっけ。これは脱線したが、伊福部からもキチンキチンと返事がきた。罰の

作品年表

曲名	作曲年	ジャンル	編成	レコード	楽譜	初演	備考
● ピアノ組曲	1933	ピアノ	Pf 22分	コロンビア ('42豊増昇) 東京音楽大学 現代日本の音楽 第一集(全曲)	Universal Schirmer Promusica 竜吟社，全音音友(抜)	1936 チェレプニン(一部) 1938 ジーノ・ゴリーニ 1946 短波放送初演M・グルリット	1938年ベネチア国際現代音楽祭入選
● 日本狂詩曲	1935	管絃楽	3管，Hrp 2，Pf I 打 9 15分	東芝JSC3012 東芝TA—7015 〃 TA—8018	Universal Schirmer Promusica 竜吟社	1936．4.5ボストン，フェビアン・セヴィッキー指揮	1935年チェレプニン賞第一席（パリ）
● 土俗的三連画	1937	室内管絃楽	14の独奏楽器	ビクターVX—116～8	同上	(1939．3 伊国際放送) 1943．4.2 1.22 N響ローゼンシュトック	ローゼンシュトックがフル管絃楽に編曲
● バレエ 盆踊り（8場面よりなる舞台舞踊音楽)	1938	舞踊	打，Pf 40分		同上及び音友	1938 ウィーン，Russian Ballet	構成 チェレプニン
● ピアノと管弦楽のための協奏風交響曲	1941	管絃楽	Pf. 3管 36分			1942．3.3 松隈陽子グルリット指揮東響	「現代日本の作曲」演奏会。空襲で焼失
● 交響譚詩	1943	〃	2管持替 18分	ビクターSP 東芝TA7015 TA8018	音友	1943．9.4 レコード初演 〃 11.20 東響/山田和男	同年ビクター管弦楽コンテスト入賞。文部大臣賞
● フィリピン国民に贈る管弦楽序曲	1944	〃	Pf. 2．3管 18分			1944．1.30 N響/尾高尚忠(式典)	焼失
● 吉志舞(きしまい古典風舞曲)	1944	吹奏	仏式36人編成 10分			1944．4.29 N響（放送）	海軍の依頼
● 兵士の序楽	1944	管絃楽	2管 12分			1944 N響	陸軍の依頼
● 音詩 寒帯林	1944	2管 28分				1945．4.26 ハルピン，新京交響楽団	満州国の依頼，焼失
● ギリャーク族の古き吟誦歌	1946	独唱	Alt. Pf. 14分	ビクターSJX1041	森田楽譜，全音	1947．1.26 ベルトラメリ能子	
● バレエ エゴザイダー	1947	舞踊	Pf. 20分			1947 不詳	江口隆哉振付
● ヴァイオリンと管弦楽のための協奏曲	1948	管絃楽	Vn. 3管 40分			1948．1.22 江藤俊哉 指揮，上田仁，東響	破棄
● バレエ さまよえる群像	1948	舞踊	Pf. 3 30分				石井漠振付
● バレエ サロメ	1948	〃	2管 45分			1948．5.29～4日間上田仁指揮東響	貝谷八百子振付
● 子供のための舞踊曲 リズム遊びのための10の小品	1949	〃	1管	ポリドールSP			作曲者指揮で吹込
● バレエ 憑かれたる城（バスカーナ)	1949	〃	2管 50分			1949．12.20 上田仁指揮	貝谷八面子振付 百
● サハリン島土蛮の三つの揺籃歌	1950	独唱	歌，Pf. 15分	ビクターSJX1041	春秋社，全音	1949．10 ベルトラメリ能子(NHK)	
● バレエ プロメテの火	1950	舞踊	2管 50分			1950．12.11 東響 上田仁	江口隆哉振付
● バレエ 日本の太鼓	1951	〃	2管 太鼓 8 20分			1951．12.29 東響 上田仁	江口隆哉振付
● ヴァイオリンと管弦楽のための狂詩曲	1951	管絃楽	Vn. 2管 23分				ジェノワ国際作曲コンクール入選。Vil 協奏曲 48の改作。破棄

曲名	作曲年	ジャンル	編成	レコード	楽譜	初演	備考
●バレエ　人間釈迦	1953	舞踊	2管　Chor 120分			1953　東響　上田仁	石井漠振付
●シンフォニア・タブカーラ	1954	管絃楽	3管 30分			1955．1.26 インディアナポリス交響楽団，セヴィッキー指揮 1956．3.16 東響　上田仁	
●ヴァイオリンとピアノのための二つの性格舞曲	1956	室内	Vn．Pf. 18分			1956．10　アムステルダム二重奏団（ナップドケリン，アリス・ヘックス）	1961年に改作
●アイヌの叙事詩に依る対話体牧歌	1956	独唱	歌，ティンパニー		音友，全音	1957．1.12 ベルトラメリ能子　小森宗太郎	
●仮面舞踊劇　ファーシァンジャルボー	1956	舞踊	3管 100分			1956．10　東響　上田仁	江口隆哉・宮操子・仮面作成・川尻泰司
●合唱頌詩　オホツク海	1958	合唱	Chor.（混） 3管（Vn．Vlaなし） 20分		「音芸」付録	1958．2.26 北海道放送　東京オーケストラ，東京ヴォーカル，指揮作曲者 1959．4.18 NHK，東唱，N響，岩城宏之	
●ヴァイオリンと管弦楽のための協奏風狂詩曲	1959	管絃楽	3管			1959．11.5　NHK，小林武史，ABC響，森正	1951年の改作
●知床半島の漁夫の歌（更科源蔵詞）	1960	独唱	Bass．Pf．		全音	1961．2.9　木内清治，大島正泰	
●バレエ　孤剣舞	1960	舞踊				1961．10.26 N響小杉太一郎	江口隆哉振付
●ピアノと管弦楽のためのリトミカ・オスティナータ	1961	管絃楽	Pf．3管 23分	ビクターVX—60	全音	1961．10.9　金井裕，東響，上田仁	
●古代日本旋法による踏歌	1967	ギター	Guit． 17分	東芝TA—7015，TA—6024	全音，現代ギター一社	1968．2.11 パリ国立放送　阿部保夫	
●箜篌（くご）歌	1969	〃	Guit． 17分		同上	1969．5.27 渡辺範彦	
●ギターのためのトッカータ	1970	〃	Guit． 7分	東芝TA—6063	同上		
●吹奏楽　ブーレスク風ロンド		吹奏楽	Guit． 16分			1972．東京仔正吹奏楽団，手塚幸紀指揮　交	
●バレエ　日本二十六聖人	1972	舞踊	2管 150分			1972．3.30.31　東響，小林研一郎指揮	江口隆哉振付
●鄙曲　鬢多々良（えいきょくびんたたら）	1973	現代邦楽	能管，篠笛2，竜笛，ひちりき，琵琶（筑前，薩摩）箏3，十七，打（小鼓2，大鼓，楽太鼓） 18分			1973．10.5　日本音楽集団，田村拓男指揮	文部省，文化庁委嘱作品
●ヴァイオリン協奏曲	1975	管絃楽	Vn．3管 23分			1975．9.17 黒沼ユリ子，日本フィル，山岡重信　9	1971年NHK，徳永二男指揮　石橋義也
●オーケストラとマリムバのためのラウダ・コンチェルタータ	1976	〃	Mrimb．3管 27分			1979．9.12 新星日響，指揮，山田一雄，Mrb．安倍圭子	新星日響，創立十周年記念作品
●ヴァイオリン協奏曲第二番	1978	〃	Vn．3管 28分			1979．3.8,9　チェッコスロバキア国立ブルノ・フィル・指揮　ズデニックコシュラー Vn 小林武史	小林武史に献呈
●二十弦箏曲物云舞	1979	箏曲	箏一面 17分			1979．11.28 野坂恵子	野坂恵子に献呈

祝

新交響楽団第87回演奏会

20

東京音楽アカデミー

東京都渋谷区鉢山町15—5 〒150
PHONE 462—5711～3

発行　新交響楽団
デザイン　APO DESIGN
写植　アート・プロ
印刷　太平印刷